



山梨県障害者差別解消支援ネットワーク会議

【トピック】

- 日常の中での差別への思い
～小林俊介さん（障害者主張大会最優秀賞受賞）へのインタビューから
- 県政出張講座のひとつから
- 心のバリアフリー 地域での広がり

事務局：山梨県障害福祉課
〒400-8501
山梨県甲府市丸の内1-6-1
Tel 055-223-1460
Fax 055-223-1464
E-mail shogai-fks@pref.yamanashi.lg.jp

昨年12月、障害者週間に開催された「障害者主張大会」で最優秀賞を受賞された小林俊介さんにお話をうかがう機会をいただきました。ネットワーク通信No.22で主張大会の特集を組みましたが、本号では、大会での主張の日常の中の差別への思いについて、「映画やドラマなどで、主役ではなくエキストラで障害者が出てくるのがほとんどない」という視点から訴えた小林俊介さんの気持ちをうかがいました。

好きなこと、やりたいことを

まず、多彩な活動がイメージできる「肩書き」からお話をうかがいました。

もともと狭く深くという性格だが、好きなことを好きな形でやっているうちに、活動の幅が広がった。まず、お笑いは大好きなことのひとつであり、しゃべりを得意とする自分を活かせるものでやっていて楽しい。福祉講話と県ポッチャ協会会長の活動にも、力を入れている。メディアに取り上げられることも多い。ピアカウンセラーは研修を受けて資格を取ったが、残念なことにニーズが少なく、実働は今のところない。バーチャル工房の仕事は依頼される件数が少なくなっている。

小林俊介さんの名刺(紹介に代えて)

お笑い活動・福祉講話活動・山梨県ポッチャ協会会長兼選手
ピアカウンセラー・バーチャル工房やまなし準ワーカー

Kobayashi

小林

Shunsuke

俊介



「社会にドンドン出たい」と語る小林さん



日常の中での差別への思い

エキストラとして障害者が出てこないということは、何を意味しているのだろうか。以前見た海外ドラマでは、エキストラも含めた障害の有無や人種を超えた様々な登場人物に驚いたことがある。日常の生活を描いているのに、当然いるだろうと思われる人たちが描かれないのはなぜか。障害のある人が特別視されているのではないか。当たり前前の存在として理解されることが、差別そのものをなくすことにつながるように思う。

念願だったエキストラとしての出演は、「グーチョキパービヨンド」という短編映画で実現した。手塚悟監督（山梨県出身）の映画のアンコール上映会のための特別企画として撮り下ろした映画だった。やまなしフィルム・コミッションのホームページで申込んだが、車いす利用とはあえて記載せずに応募した。撮影当日は、多少の不安もあったが、現場ではすんなり受け入れてもらい、結婚式の参列者の一人としてフレームに収まった。公開が限られていたので自分では見ていないが、友人が「列席者の一人で、しっかり映っていた」と知らせてくれた。

主張大会で触れた「これまで差別されたことなど一度もない」という経験は、小さなころからの私を取り巻く人たちとの関係に基づいている。

まず、小さなころからの家族の自分への接し方があげられる。生活の中での様々なことを特別のこととしないで、当たり前前のこととして接してくれたように、今になって思うことがある。父は時には厳しく接しながら、やりたいことをやりたい方法でさせてくれ、母は適度にブレーキをかけてくれながらも、いざ決まると進んで手伝ってくれた。

友人との関係では、特に小さいころからの友達との関係が特徴的だ。中学生のころ、友人が私の靴をとっては投げたてじゃれ合うということをよくやっていた。他の小学校からきた子から制止されたが、他から見ればいじめの現場と捉えられたのかと思う。

また、教室で友達とビー玉遊びをしているときに「（外遊びしないで）なんでそんなことしているの」と言われ、一緒にいた友達に悪いなと思ったことがある。

いつも一緒だと当たり前前のことでも、他から見ればそうではないことがある。仲の良い友人は、「迎えに来てやっただぜ」と気軽に来ては、一緒に出かける。お笑いでいう突込みで気軽にやり取りできるのは、お互いに気遣いなく付き合える関係だからだと思う。

様々な思いを受けて

ホームページやSNS上で、「障害」と表現すると、「『障がい』」と書くべきではないか。差別的な表現になる」とお叱りを受けることがある。自分としてはどちらでもよいし、こだわることでもないと考えているが、論争するのも面倒なので、「障がい」を書くことにしている。それを意識すること自体も、差別的な感情につながっているのではないかと感じる。

手助けの声をかけてもらうのは、当事者として嬉しい。しかし、自分としては、困った時には自分から声をかけるので、その時には手を貸して欲しいという思いがある。障害のある人は、思いや障害の状況が一樣ではないので、手を貸して欲しいタイミングは個々様々なのも分かって欲しい。手伝いが必要か、どんな手伝いがよいかなど直接聞いてもらうとよいと思うし、必要としているかどうか一呼吸置いてもらって、声をかけてもらうとよいなとも思う。

よく利用する店舗で、ある日入店しようとする、入り口にスロープが取り付けられていた。直接お願いしたことはないが、利用している自分を意識してくれているとも感じた嬉しいできごとだった。

社会にドンドン出て活動したい

福祉講話活動では、始めた当時は年齢の近い高校生対象のほうが話しやすいと思ったものの、実際始めてみると小学生はストレートに戻ってくるものがあり、楽しいことが多い。ある程度の年齢になると、質問でもいろいろと気を使ったものになってしまうように感じる。小学生は、時には先生が思わず制止したくなるようなものもある。純粋であるが故のことであり、気を使わず感じたままの疑問をぶつけてくれることで、お互いの理解が深まると考えている。この経験からも、小さなころから障害の有無に関わらず、一緒に活動することが大切で必要なことなのだと改めて感じる。

しゃべりが好きな自分を活かせるという点でも、お笑いが好きで、小学校入学前から付き合いのある友人を相手にして、お笑いのコンビを組んで活動している。3年前、YBSで1時間の特番として、お笑い芸人としての活動を取り上げていただいた。お笑いでは、はじめの頃は障害を取り上げる自虐的な内容も扱ったが、お客の反応に自分で違和感があって、現在はネタにしていない。

山梨県ポッチャ協会では、会長兼選手として活動している。残念なのは、ポッチャが重度障害の人達の競技として見られ、簡単な競技なのだろうと思われていることだ。ポッチャの普及だけではなく、障害の有無に関わらず一緒にポッチャを楽しむことで、お互いに分かり合える関係づくりができればと考えている。

また、スポーツボランティアとして、山梨クィーンビーズの試合で館内放送を担当している。試合を盛り上げて、選手が活躍できるような雰囲気をつくることができれば楽しい。

県政出張講座のひとつ

(株)日本郵便 南アルプス部会 職員研修会

1月下旬、県政出張講座として、南アルプス市内の郵便局の皆さんの研修会に招いていただきました。研修会では障害者差別に関する理念や障害者差別の相談及び合理的配慮の提供事例に関する研修のほか、県西部地区の郵便局全体で筆談スペース設置の取組を進めていただいていることから、ミニ手話講座も併せて行いました。参加された方々は熱心に受講していただきました。

なお、研修の折にやまなし心のバリアフリー宣言事業所への登録をお願いしたところ、早速当日午後の会議で各局へ働きかけをしていただきました。有難いことに、後日、南アルプス市の全16局が登録申請をしていただきました。筆談スペースの設置とともに、心のバリアフリー宣言事業所のシンボルマークがさらに広がっていくことを願っております。

心のバリアフリー 地域への広がり

心のバリアフリー宣言事業所の取組では、日常生活に密着した業態の事業所の登録も大切ではないかと考えています。

久田登美栄さん(上野原市)、宮下くに江さん、志村幸子さん(富士吉田市)をはじめ各市町村の障害者差別地域相談員の皆さんが、ご近所の個人商店や事業所に直接働きかけて登録事業所を募っていただいています。

すべての人の日常の暮らしやすさを考えるとき、生活に密着した近所のお店の理解は欠かせません。店頭での宣言事業所のシンボルマークから、心のバリアフリーの話題の広がりも期待しています。関心の輪が様々な地域でどんどん広がっていくようにしたいと思います。

ポッチャ紹介

▶ ランプ(投球補助具)を使っての投球 (山梨県ポッチャ協会ホームページから許可を得て転載)



- ▶ 県ポッチャ協会のホームページによると、協会の設立は昨年11月で、チームのメンバーは9人。
 - ▶ ポッチャの主なルール等は次のとおり
 - 目標球の白いジャックボールに、赤や青の各チームのボール6個ずつを投げる。
 - ジャックボールに最も近いボールを投げたチームが勝ち
 - 相手ボールよりジャックボールに近いボールの個数が得点となる。
 - 自球をぶつけてジャックボールを移動させて有利な局面をつくることもできる。試合では、駆け引きと戦術の巧みさが問われる奥の深さがある。
 - 投げることが難しい場合は、蹴ったり、投球補助具のランプを使って介助者に自分の意思を伝えてボールの転がりを制御する。
- ◆ 協会では、障害の有無に関わらず選手、スタッフを募集しています。

活動の幅を広げるために



この場を借りて、CM!!
福祉講話のご要望、受付けています!!特に国中地区の小学校、いかがですか?
「山梨スピリッツ」最新号に私の特集が載ってます。参考にしてください。

県ポッチャ協会では、出張ポッチャ、受付けております!!
県内であれば、イベント、祭りなどに出張します。
お気軽にご相談ください。
まずは、協会のホームページへ「山梨県ポッチャ協会」で検索

推進員日誌 推進員のつぶやき

最近、大人の発達障害に関する本を読んで、自分自身と向き合って考えることがありました。自分でも十分に自覚するところもあり、内心で深くうなずき、自分の特性と行動に納得してしまうところがありました。自分にとっては、改めて自身を振り返る良い機会にもなっています。様々なことを生きづらさと捉えず、特性、利点として、自分でも身の回りの環境調整を意識しながら、うまく自分自身と付き合っていくと今更ながら思うのです。

障害のとらえの転換として、「社会モデル」が定義されています。ひとりがみんなに合わせるのではなく、みんなが一人一人に合わせていくことが求められているのだと考えています。自身の特性を十分意識し、それを周囲に発信し、まわりのみんなが合わせやすい状況をつくることも大切です。小畑文也会長が示された「セルフ・アドボカシー」(ネットワーク通信No.17)の大切さを改めて感じています。

農福連携の取組にみることでできるように、様々な状況にある当事者が積極的に活動の範囲を広げていくためには、その活動に対し、当事者とニーズのある人たちとを結びつける積極的な取組が必要です。

小林俊介さんは、インタビューで「私の障害は進行性なので、体が動くうちはできることを精一杯したい」と話してくれました。多くの活動の場がさらに生まれることを期待しています。

編集及び文責：古屋 徳康(県障害者差別解消推進員)